

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	阿部 美香
論文題目	歌川広重の抱いた風景観に関する試論		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、風景画を得意とした江戸時代末期の浮世絵師、歌川広重 (1797～1858) の風景観を、「文化としての風景」、「風景の集団表象」という切り口から、分析し、明らかにしたものである。分析する素材としては、広重の『絵本江戸土産』と「名所江戸百景」そして比較対象として広重の作品より20年ほどさかのぼる『江戸名所図会』などが主なものである。</p> <p>第1章では、客観的な事物から構成される景観に対し、人々が見、その中で暮らす主観的なイメージとして風景をとらえ、「文化としての風景」という概念を提示する。さらに、ある文化集団に属する人々の風景のとらえ方には、文化的共通性があるとし、これを「風景の集団表象」と呼ぶ。こうした研究テーマに取り組むため、人文主義地理学のアプローチが採用され、既往の風景論が参照される。</p> <p>江戸後期の浮世絵風景画は、注文主の求めに応じて制作される絵画作品とは異なり、一定の購買層を想定して制作され大量に販売されるので、人々の「風景の集団表象」を反映すると考えられる。こうした観点から、広重の作品に示された風景観を、他の作品と比較しつつ分析するという視座が提示された。</p> <p>第2章では、先行する『江戸名所図会』(以下『図会』と略記)との比較において、広重の『絵本江戸土産』(以下『土産』と略記)の構図が検討される。『図会』の場合、先行する『都名所図会』などと同様、俯瞰景で社寺を説明的に描くことが多いのに対し、『土産』においてはそのような描写は減り、透視遠近法などを駆使した、より写実的な風景の描写に重点が移っていることが指摘された。</p> <p>第3章では、広重の用いる言葉から広重の風景観を探る手がかりとして、『土産』の説明文中に用いる「風景」の類義語が分析された。ここでは「風景」が汎用的に用いられるのに対し、「景色」・「絶景」など他の類義語は特定の主題に関連して用いられることが多いことが明らかにされた。</p> <p>第4章では、『絵本江戸土産』の絵画に付された文章の分析を通じて、広重の風景観に迫っている。その際、『図会』の説明文との比較も行われた。文章の多くは、その場所の故事来歴および位置情報を含むが、それ以外の記述を風景描写ととらえ、分析した。風景表現の着眼点を以下の11のカテゴリーに分類した。①眺望の良さ、②眺望以外の景色の良さ、③特徴的な事物、④山水美、⑤遊観的価値、⑥賑わい、⑦名物、⑧風流さ、⑨霊験、⑩耕地・広野が広がっているさま、⑪季節・天候・時刻を感じることである。そしてこのカテゴリーごとの描写地点を地図化し『図会』の場合と比較した。たとえば、①眺望の良さとして取り上げられている地点は、台地の縁などに多いことなどが明らかとなった。また、⑩耕地・広野が広がっているさまへの称賛に関しては、「風流である」という審美的評価が特徴的であった。</p> <p>この耕地・広野の広がりへの称賛を、多角的に検討するため、第5章では僧侶十</p>			

方庵敬順が著した『遊歴雑記』の記述を分析した。『遊歴雑記』においても、耕地の広がりや眺望の良さなどの観点から肯定的にとらえる場合が多いが、肯定・否定どちらの評価もなされない場合や否定的な評価がなされる場合もあることが指摘された。

第6章では、広重最晩年の作品であり、浮世絵風景画の集大成ともいえる「名所江戸百景」（以下「百景」と略記）が、『土産』における風景描写との比較において検討された。「百景」はテキストを含まないが、描かれた対象や構図の分析を通して、広重の風景観に迫っている。そこでもやはり耕地・広野の広がりへの称賛という観点を見出すことができた。絵画表現における田園風景・農作業の描写は「洛中洛外図」など従来の多くの作品に見られるが、それらは豊穡への祈念といった主題に関連する。それに対し、広重における田園風景の描写は「風流さ」を見出す点に特徴があった。

第7章は結論の章である。本論文における広重作品の分析を通して、彼の風景観には耕地・広野の広がりを「風流」と見なす肯定的視点という特徴があることが明らかとなった。また、風景画作品に取り上げられた地点の多くが、庶民の生活圏である低地（下町）であることも指摘できる。『土産』に収録された作品は西洋の透視遠近法の受容を通してより写実的な風景描写を実現しているが、そのテキストの分析を通して、広重の風景観を明らかにすることができた。そしてこうした風景観に基づき、絵画的アトラクションを付加する形で、「百景」が制作されたといえる。画家と出版者は、多くの部数の作品の制作・販売・流通を通してこの時代の「風景の集団表象」の形成に寄与した。それを構成する耕地・広野の眺望は、その時代の「日本文化としての風景」の反映であり、それは時代を超えて今日私たちが抱く日本風景のイメージを規定し、さらに今後の田園風景設計への指針を与えるものなのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、江戸時代末期の浮世絵師、歌川広重（1797～1858）の風景観を、彼の作品である風景画絵本『絵本江戸土産』（以下『土産』と略記）と浮世絵風景画集「名所江戸百景」（以下「百景」と略記）を通して明らかにすることを目的とする。作品の分析においては、絵画そのものだけでなく、添えられた説明文も重視されたところがひとつの特徴である。本論文の成果として特筆されるのは、比較対象とされた『江戸名所図会』（以下『図会』と略記）や『遊歴雑記』も含め、大部のテキストを読破し、分析の素材としていることである。分析されたテキスト内容はいろいろな形で分類・整理され、表や分布図の形で提示された。本論文で、広重の風景観に関して新しい切り口を提示することができたのも、こうした努力のたまものであったといえる。

こうした素材に基づき、第1章では「人にとって風景とは何か」という問題意識から、幅広い既往研究の展望がなされた。そこでは風景は客観的にそこに存在する事物と言うより、人々の心の中に形づくられるイメージとしての側面が重視され、そうした風景は文化の一側面でもあるとされた。こうした点で、研究の目的と方法について、そのオリジナリティを評価することができる。本論文では、このような研究上の背景をふまえて「人文主義的研究のアプローチ」に基づき研究を進めるとするが、公聴会において、「人文主義地理学的研究」という趣旨ではないのかとの指摘がなされたのに対して、申請者から「そうである」との回答があった。

第2章以降の実際の分析においては、テキスト分析のプロセスにおいて、読み取り・解釈のための多大な努力が投入されており、こうした努力を通じて広重が肯定的に評価する風景の特徴を明らかにすることができた。具体的には、眺望の良さ、遊観への適合性、賑わい・繁昌、耕地・広野の広がり的美しさ、などである。しかしながら、テキストの内容や語句を分類するという方法に偏りすぎているとの指摘がなされた。分類の基準も、時に恣意的・折衷的であると感じられる場合があった。第5章第1節の(2)などは、分類した結果を羅列しているだけのようにも見えるし、本論文の最も主要な構成部分である第4章の記述でも、分類・羅列という説明過程への依存が看取された。とはいえ、大量のテキストから語句・文章要素を抽出し、整理して提示することにより、絵画作品解釈の独自の切り口を提示できたといえる。

本論文では、耕地・広野の広がりに対する審美的な評価は、広重のオリジナリティを表すものとされた。広重以前にも田園風景が絵画に描かれることは多かったが、本論文ではそれらは豊穡への願いという観点からのものであり、純粋に審美的な観点からの広重の評価とは異なるとされた。しかし、浮世絵風景画以外に視野を広げると、俳諧の世界においては田園風景に対する肯定的な評価は江戸時代中期から見られ、それに関連して俳画も描かれているとの指摘がなされた。文学・芸術作品における田園風景の評価に関する包括的な議論は、今後の研究を待たねばならないが、『図会』などにおいては「賑わい」が強調されがちなのに対し、広重の絵画作品における耕地・広野の広がりへの肯定を顕著な特徴として示した点は、高く評価

できる。

浮世絵風景画については、従来美学・美術史学の分野を中心に研究が進められ、歴史地理学の方法論に立脚する研究は多いとはいえない。本論文のオリジナリティは、絵画作品と説明文の分析にとどまらず、それらについて分布図での表現を試みたことにあり、これらは多大の努力を投じた労作となっている。このことを通じて、たとえば「眺望の良さ」が評価されている地点は台地上の縁に立地していることなどが明らかとなり、地形的背景に基づき絵画作品を解釈することの意義が確認された。また、浮世絵の購買層を意識してか、武家屋敷の多い台地上よりも、町人が居住・活動する低地に描かれた地点が多いことが指摘され、興味深い成果であると評価できる。

本論文では『図会』を比較対象としつつ、『土産』と「百景」を素材として、広重のみならず同時代の人々の名所観・風景観を多角的に分析した。『図会』においては神社仏閣をはじめとする「名所」を俯瞰景の構図を用いて説明的に描写することが多く、これに対応するテキストも故事来歴を説明することが多い。これに対し『土産』においては、広重が審美的に評価した「あるがままの風景」を取り上げ、描写もより写実的なものが多くなっている。広重の風景評価はまた、人々の「風景の集団表象」の変化の反映でもある。こうした風景観の変化は写実的な技法を受け継ぎつつ縦長の奇抜な構図に近景の事物を配した「百景」において「アートとしての風景」へと展開するのである。本論文は、テキスト分析と地図を用いた検討を通して、名所と関連づけられた風景観の変化と、そこにおいて広重が果たした役割を生き生きと描き出して、高いオリジナリティを有し、歴史地理学だけでなく美学・美術史学への寄与も多大であると評価される。

以上を総合して、申請者の論文は博士（人間・環境学）の学位に値するものと判断される。平成24年7月26日に論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降